

「福祉総合大学を目指す社大の学部教育に期待されるものとは何か」

シンポジスト	(秋田けやき会 やすらぎホームけやき 施設長 学部 1972 年卒)	佐藤 与志夫 氏
	(新潟県社会福祉協議会 生活支援課 課長代理 学部 1988 年卒、院専門職 2008 年卒)	渡邊 豊 氏
	(田園調布学園大学 人間福祉学部 助教 学部 1998 年卒、院前期 2005 年卒)	長谷川 洋昭 氏
司 会	(本学社会福祉学部教授 社会福祉学部長)	阿 部 實

阿部 シンポジウムの司会進行を勤めます学部長の阿部です。私も本学学部の13期、1973年に卒業した者です。

第一日目のプログラムに、シンポジスト3名の略歴を記載しています。「福祉総合大学を目指す社大の学部教育に期待されるものとは何か」というテーマで、シンポジウムを行います。ここに掲げた「福祉総合大学」の意味は、学部だけで総合大学にしようということではなく、1958年に短大から4年制の大学になり、今年が学部50年です。

新キャンパスである清瀬への移転を経験し、「社会福祉学研究科」という、研究大学院の修士課程、その後、修士課程完成年度に博士課程ができ、4年前に、「福祉マネジメント研究科」というかたちで、わが国初の福祉専門職大学院ができました。

そのほか、通信教育課程やスキルアップのための各種研修講座など、学部を卒業したあと、多様なスキルアップのためのフォローアップ事業を展開し、卒業生の生涯にわたる社会福祉の専門職としての資質の向上を図っています。シンポジウムでは、このスタートラインを形成するのは学部教育だととらえ、学部教育への期待や要望について話をしてもらえればと思っています。

3名のシンポジストにお願いした理由は、二つありました。一つは、両大学院ができたので、学部を卒業して専門職大学院に入院した卒業生。学部を卒業して、社会福祉学研究科に入学した人。純

然たる学部を卒業し第一線の福祉の現場で仕事をしている人です。本学のカリキュラムが1970年代の半ばに、「類構想」というかたちで、2学科を残しつつ、利用者別に、「児童・家庭」、「障害」、「地域・成人」というかたちで、学科制ではなく、「類」という考え方の教育に切り替わった時期があります。そこから、今の「福祉計画学科」、「福祉援助学科」、各科の原型ができあがっています。それ以前の教育を受けた人をお一人。それから、類構想に基づく教育を原宿で受けて、その後、現場で仕事をし、専門職大学院に入院した人を探しました。ですから、お一人は、純粋な原宿時代の卒業生です。お一人が、大学院を含めて、原宿時代の最後と清瀬キャンパスに移ったあとの両方がわかる人、それから、純然たる学部教育も今の清瀬キャンパスで受けて、大学院に入院した人というかたちで、3名にお願いしました。

原宿時代の代表選手は、現在、秋田県の社会福祉法人秋田けやき会のやすらぎホームけやきの施設長をしている佐藤与志夫さんで、1972年3月に卒業した方です。渡邊豊さんは、1988年に学部を卒業し、2007年に専門職大学院に入院して、原宿(類体制に基づく教育)と清瀬の両方がわかる方です。長谷川洋昭さんは、純然たる清瀬キャンパスの人といえますか、1998年に学部を卒業し、2004年に比較研究科の前期課程に入院し、2005年に修了した方です。

公式の学部50年史は、『日本社会事業大学五十年史』に書いてありますので、本日は、シンポジスト3名の個人史から見た体験的学部教育史を素材にして、今後の学部教育の在り方について、フロアの皆さんと話し合いたいと考えています。

進行としては、お一人20分程度話をしてもらい、その後、まとめて質疑応答とし、時間どおりに終わるように、進行の協力をよろしくお願いします。それでは、佐藤さん、よろしくお願いします。

佐藤 秋田から来ました佐藤です。私が社大で過ごしたエピソード的なことから話をします。

私は、今秋田で特別養護老人ホームの施設長をやっています。この施設の説明をします。秋田県では、「老人福祉総合エリア」という構想があり、県南地区、中央地区、県北地区に各一つ、老人福祉の総合エリアを作る考え方のもとで進められていました。

「やすらぎホームけやき」は、中央地区の秋田市御所野ニュータウンという、比較的新興住宅街に建てられている施設です。特別養護老人ホームが100床あります。認知症の専用棟が40床、一般棟が60床、ショートステイが20床、デイサービスセンターが定員45名、ヘルパーステーション、居宅介護支援事業所、地域包括支援センター、それにケアハウスが100床、秋田市から委託を受けて、地域センターのような、「御所野交流センター(御所野ふれあいセンター)」も経営しています。平成9年4月にオープンしました。私は、オープンのときから勤め始め、現在12年目に入った施設で老人福祉現場の実践をやっています。

私が社大に入ったのは、42年前の昭和42年ですから、随分たつたとつくづく思っています。今まで全く考えたことがなかったのですが、今回のことで自分が社大で過ごした10年間について整理し、秋田に帰ってからのことも整理するいい機会を与えてもらったと思っています。

学生時代が5年間、大学の職員として、図書館に勤務したのが5年間で、ちょうど10年です。18歳から28歳までの私にとって日本社会事業大学は、自己形成そのものだったような感じを受けて

います。

その10年間、私は「原宿」という一つの共同体から一步も抜け出すことなく、ずっとそこにいました。清瀬に移ってから何回か来たことがありますが、こんなにすばらしく、私たちが学んだ原宿校舎はこのような校舎ではありませんでした。けれども、その原宿校舎には、私にとっては非常に懐かしい思い出があります。

私たちのときは、まだ、「国立1期校」、「国立2期校」という制度があった時代です。私が社大を選んだ動機は不純で、授業料が安かったので選んだ気がします。本音を言うと、「社会福祉は、これからのいろいろな意味での大事な仕事になるんだな」と、心の片隅では思っていたのですが、何しろ授業料が安い大学を探さなければいけません。その当時、社大の年間の授業料が1万2千円と国立大学と同じだったので選び、社大を受けたら合格になりました。

入試科目は、今と全く違うと思います。英語、国語、数学もありました。それと社会科が2科目で、国立大学入学のために勉強している学生が受験した学校ではないかと思えます。

受験番号は33番、講堂で試験を受けました。私は秋田の田舎育ちですから、東京は怖い所だと。特に、ラッシュになると電車に乗るのは大変だということで、社会科が2科目のときに、終わる時間の1時間前には退席できるので、とにかく早く帰らなければいけないと、会場をあとにしたことを覚えています。

あとで職員になってからわかったことですが、成績は、受験番号と同じ“散々”だったようです。ちょっとどこかにぶら下がったのだと思っています。

今もそうだと思いますが、私が入学したときは、女性が非常に多く、合格者は、100名定員でも120名ぐらいだったと思います。その中の半数以上の人が現役ではなく、私はたまたま運よく合格しました。

最初にかけられた言葉を、ショックで今でも覚えています。「佐藤くん」「はい」「君、『資本論』を

読んだことある？」「いや、知ってますけども」「君、それを読まないで社大に入ってきたの？」。このときのショックは非常に大きなものでありました。そのことがあって、「俺は絶対それは読まないようにしよう」と思ってきました。

原宿は、あの地で学んで、あの地で働いて、あの地を去って秋田に帰ったので、私にとっては本当に青春の原点です。私の今あるものは、あそこで育ててもらったものだと思っています。

社大に入ってきた同期たちは、目的意識を持って入学してきた人たちが多かったように、私は感じています。たとえ私のように明確な目的意識を持たなくても、その時代の価値観に対して、思いや自分なりの考えを持って入学してきた人が多くいたと思います。そういう意味では、原宿時代のもものは、私の人生に大きく響いています。

私たちが入学した昭和42年に、杉森先生が教員として入ってきました。今でも非常に懐かしく感じています。当時の教員はほとんどそうだったと思いますが、杉森先生は、授業はもちろんですが、アフターファイブもよく世話をしてくれました。先生のうちに学生が集まって、いろいろな勉強やゼミを学んだ経験は、今でも心の中に残っています。

今日は、このあとに木田賞と学生研究奨励賞を受ける人がいると思います。杉森先生が学生たちの奨励賞の基になったという話を聞くと、杉森先生が学生を一生懸命育てた功績が生きると、私なりに感じています。

社大に入学してから、「自己実現」、「全面発達」というキーワードを頻繁に耳にすることで、とても新鮮なものを感じました。自分なりにその意味をそしゃくして、その後のさまざまなことに出合ったときに自分自身の中で問い返すこれらの言葉は、われわれの時代の者にとっては、一つの指標だと思います。

「ぶれない姿勢」と書きました。社大で出会った多くの先生や友人たちは、自分なりの考え方というのか、生き方、志に通じるものが、学生時代から地道に継続されています。それが、今現在に

至っても生きています。まさにぶれない姿勢が、私たちの世代はあった気がします。

学生時代のことで一番心に残っているのは、社会調査です。私は、杉森先生と仲村先生が栃木県烏山市の隣町の馬頭町で農村調査をした際に、手伝いをしたことがあります。そのあと、神奈川県藤沢市で、「精神薄弱児」の実態調査をしました。

その調査が、今の私にとって大きな意味を持っています。私たちは、実態、現実を見る機会がなかなかなかったのですが、社会調査の中で現実、実態を目の当たりにしました。そこが今の私の大きなパネになっています。

私は案外調子がいい性格ですから、馬頭町の農村調査のときは、日中はなるべく行かないようにしました。1回目に日中に行ったら、「こんな忙しいとき来て、何するんだ」という言い方をされたので、夜、行きました。夜、行くと、お酒が出ます。それも一つの楽しみでした。1軒の家の人には、「婿に来ないか」という話もあり、いろいろな話をその中で聞くことができ、実態がよくわかりました。

帰ってから、調査に行った人たちと一緒にいろいろなことを話し合う機会がありました。先生を交えて侃々諤々と議論したことが、今の私にとって大きな財産になっています。そこに私の原点があると言っても過言ではありません。

私の人生の中で、社大の封鎖という大きな事件があったことも事実です。いろいろな考え方がありますが、社大の封鎖が、自主的な、権力を入れないかたちで終了することができたことは、職員もそうですが、先生方をはじめ、学生、それから多くの先輩達のいろいろな知恵が総集されて出来たということではないかと、今、つくづく感じています。

本来は大学を4年で卒業しますが、もう1年残りたくて残っていたら、杉森先生から、「社大の図書館で職員を探しているようだから、君、どうかね」ということで、5年生のときから、アルバイトを兼ねながら、図書館で仕事をさせてもらいました。

そのときの自分がやった仕事をひもといてみた

ら、いろいろな文献集など、いろいろなものが今も残っているようです。自分が残した精神薄弱児に対する文献目録、高齢者福祉の文献目録といったものを閲覧すると、今でも思い出すが、全国に埋もれた、「社会福祉調査研究資料の発掘と収集の展示会」をやらせてもらったことです。

全国のいろいろなところから、社会福祉に関する調査、あるいはいろいろな公になっていない本を、「社会福祉を学んでいる大学の図書館」という力でたくさん集めた経験があります。それがNHKテレビに取材され、松嶋先生がちょうどその画面に映っていたことが、今でも記憶に残っています。私の18歳から28歳という人間形成の原点が、ここ原宿に生まれ育られました。

28歳になったとき、無性に家に帰りたくて、居ても立ってもいられなくなりました。家内は教員でしたが、辞めてもらい、秋田の先輩の紹介で、「秋田県厚生協会」という法人の高齢者施設に勤めました。私が今ある原点が、またそこに一つ見えます。

3月30日に秋田に着き、4月1日から特別養護老人ホーム高清水寿光園という、秋田県で最初に設立された特養に勤めました。4月9日の朝、横手市方面にある田舎の実家の母が冷たくなっていました。前から特別病気を伏せていたわけでもありません。朝起きたら冷たくなっていたので、“突然死”みたいなものですが、52歳でした。帰ってたった1週間でした。もう少し早く亡くなっていたら、私は社大に残っていたのかなという考え方もありますが、母が私を迎えてくれるきっとこれが最善の道だったと今は思っています。

秋田に帰るといって何とも言われぬ思いがあり、居ても立ってもいられずに帰ると、母親の死が、第一番目に大きくありました。そのときから、私の考え方が大きく変わっていきました。「今というこの一瞬を大事に生きていくことが、いかに大切なことか！今という時間は、決して戻ってこない。だから、一瞬一瞬を大事に生きていくことが、大切なことではないだろうか。

このことを強く感じ、自分の仕事や生活に思い

をはせるようになりました。これが私の人生の中で、本当に大きな支えです。今という人生を支えられる人になっていきたいと考えるようになりました。

高清水寿光園に3年勤め、そのあと知的障害児の施設に移り、長く勤めました。52年から55年までのたった3年間ですが、高清水寿光園で、特に上司である施設長からいろいろ言われたことが、一番勉強になり、今でも私の心の中に残っています。

当時の秋田県は、県及び市の奨学金で社大で学んだ人たちが、現場に帰ってまた頑張る、「給費の制度」がありました。私が帰った当時は、給費生の人たちが、県や市の社会福祉関係の重要なポストに就いていた時代です。ですから、社大を見る目が、今とは若干違っていました。

私は10年間という東京生活を終えて秋田に帰りましたが、社大の卒業生ということで、私に対する目は、針のむしろに座るといって感じを受けるぐらい、本当に厳しいものがありました。

今は廃刊になっていますが、「老人福祉」という月刊誌がありました。高清水寿光園に勤めて2年目に、ボイラーマンや寮母主任と一緒にグループを組み、「特別養護老人ホームにおける洗濯に関する一考察」という論文を懸賞論文に出したら、たまたま入選しました。

賞金は施設で使うことにしましたが、そのときに、多分施設長がほめてくれるものだと思っていたら、施設長が言ったのは、「君ならこのくらいのできるのは当然だ。もっと志を高く持って臨んでください」という言葉でした。私のあまのじゃく的な考え方を見透かしたような言い方で、とてもありがたかったと思っています。私自身が社大に学んだことが、いろいろな意味で、今、かなり大きなベースとなって残っています。

今、私は100名以上の職員を抱えています。職員研修のときに言う言葉です。「どんな経験でも無駄なものは何一つないんだ。自覚して仕事に取り組む姿勢が重要である。若いときに一番大事なことは、自分の好きな仕事をするということではなく

て、人生経験が浅い若い人には、自分がどんな仕事に向いてるかということよりも、むしろ自分のやっている仕事を好きになるということのほうが、大事なことではないか。やはり目標を持って仕事をしていくということが、大事ではないのかと思います。

自分の携わっている仕事とは、私の人生の目的の中で、この仕事というものが合っているんだ。どんな仕事でも、それが一生懸命前向きに進んでいくと、だれか人のためになる。福祉の仕事というのは、やはり人と人のかかわり合いの中で成立しているはずです。しかも、人に幸せになってもらいたいという思いがある援助技術体系じゃないかと、私は思っています。

私は還暦を迎える時期に来ています。あとのお二人は、昭和41年生まれ、昭和47年生まれで、「私だけがどうして20年代なのか。30年代の人を呼んでくれればよかったのに」と思っています。私は昭和23年生まれですから、ちょっと差があり過ぎると思いますが、それでも、社大で学んできたことのベースが、私の中に大きく残されています。そのことが、今の私をつくってくれたと思っています。この思いを伝えていくことが、歴史の伝達になっていくと思っています。こういうところで話せることでもありませんが、やはり大事なことではないかと思っています。

今、私が一番抱えている問題は、若い人たちが、私たちの仕事場にたくさんいます。でも、とても悩んでいます。そして、「やりがいがある仕事だ」と、皆さんが言っています。けれども、やりがいだけではなかなか続けることは難しい時代になってきています。

福祉の仕事の基本は、相手の気持ちをくんで、思いやりを持ってやっていくことではないか。お互いを思いやれる社会、人とのつながりを大切にできる社会、それが今、まさに求められているのではないか。

しかし、現実を考えると、だれしものが孤独だったり、人とのつながりが希薄だったり、やりきれない閉塞感を持っています。いろいろな事件を考

えると、そこにいろいろな原因があるのではないか。だからこそ、人の命の大切さ、家族の愛、両親の愛、親子の会話など、人間として生きていくうえで当たり前だと言われていたことに、少しスポットを当てていくべきではないか。

「私が年を取ってきたからそう思っているのかな」とも思いましたが、考えてみると、それが私の原宿時代からの原点だった気がします。自分の思うように人生や人を変えることはできません。しかし、自分の人生の中で、たった一つ自分の責任で変えることができるのは、自分自身であると思います。より高く、より大きな観点から変わっていくことが、1回しかない自分の人生に対する最大のポイントではないかと思っています。

そういう意味を持って、私はこれから後輩を育てていきます。そのキーワードを皆さんから教えてもらい、こちらにいる新しい学問を学んだ先端にいる人たちの助言・指導を仰ぎながら、お土産をたくさん持って秋田に帰りたいと思っています。

阿部 ありがとうございます。佐藤与志夫さんは、4年前に本学学内学会賞である木田賞の実践賞を受賞しています。

続いて、渡邊さん、よろしくお願ひします。

渡邊 皆さん、こんにちは。渡邊です。どうぞよろしくお願ひします。

佐藤さんの話を聞いて、世代は違うものの共通するところもあったり、長谷川さんにおいても、同じように世代は違いますが、やはり共通するところがあると思います。

専門職大学院で学ぶため、新潟県社会福祉協議会を1年休職して復帰しました。「生活支援課」というところで、「日常生活自立支援事業」、「成年後見制度」、「福祉サービスの苦情解決」、「高齢者総合相談」、「生活福祉資金」と、新潟県社会福祉協議会の中でも直接援助的な業務を一手に引き受けています。

そういう業務を任された理由には、専門職大学院で1年間学んできたので、「渡邊、しっかりやってくれ」という期待が込められていると自分では

理解しています。

つい先日は、生活福祉資金のリバースモーゲージを利用したい高齢者の自宅を福祉事務所や地元の社会福祉協議会の人とともに訪問し、事情を伺いました。この制度では新たに不動産鑑定などの知識も必要になってきます。業務で必要とされる知識の範囲も広がってきています。

私は、昭和41年生まれではなく、昭和38年生まれです。この3年の差の謎はどこにあるのか。実は3人に共通していることですが、5年で卒業しています。そこが一点です。あとは、一浪して大学に入ったことと、自分でやりたいことがあったので、大学を卒業してもあえて就職をしないで、1年やりたいことをやりました。

新潟県出身の学部卒の先輩丸山(仁)さんが、私のことを「超イチリュウ」と言うのですが、「イチリュウ」の「リュウ」は、「流れる」ではなく「留まる」の「一留」です。

1年大学に残り、卒業後も自分の志を持って活動しましたが、同じ学部の同級生や先輩、また先生方にもいろいろ相談しながら、最終的には自分で道を決めていきました。

振り返ると、自分では間違っていなかったと思います。そういう人生を選択する幅というか、自由な部分が、自分の学部時代はかなりあったと思います。

一方で、去年1年間、専門職の大学院生というものの、松窓寮で学部生と生活をともにしました。今、清瀬に松窓寮がありますが、その前は文京区にありました。両方の松窓寮に入寮したのは、多分私が初めてだと思います。

寮生である学部生とともに生活していると、「まじめだな」というのが率直な感想です。自治寮ということで、それぞれ学部生が役割を持ちながら、寮の運営をしています。見た目には汚いかもしれませんが、毎週水曜の夜10時になると、みんなで集まって、寮の掃除をします。こういう電灯を見ると思い出しますが、私は整備部に所属していて、蛍光灯が切れると換えたりしますが、みんながさまざまな係を担いながら、寮を運営しています。

自分自身の学部時代もそうでしたが、原宿のキャンパスでいろいろなことをしながら、みんな一生懸命でした。ある寮生を見ると、いくつもサークルに入っている、大学祭があると実行委員で頑張っている。授業についても、当時は、学校にいないで、実習とか、自分なりのテーマを決めて活動している部分がありました。

これはデメリットとして感じるころもありましたが、社会福祉士の資格制度が私の卒業後にできました。今の大学にはそれに対応した授業がありますが、出席を取ることが前提になっていて、原宿時代の大学に比べるとかなり窮屈に感じます。私の学部時代は、先生が「渡邊は、今こういうことに取り組んでいるから、まあいいか」というかたちで、多少授業を欠席しても最終的には何とか上げてくれる配慮をしてもらいました。先生方は、学生を割と自由にさせてくれました。とても感謝しています。

実習先もかなり幅がありました。私は横浜の寿町で実習をしました。実習初日の9時ぐらいから、地域の人と焼酎を飲んでいました。酔っ払って、「ちょっとこれ、相談員さんのところに帰れないな」という感じで、酔いが何とかさめる夕方まで、寿の人とずっと一緒に過ごしたことがあります。それでも、実習先の職員の村田(由夫)さんは認めてくれて、「まず、そういうふうに入っていくことが大事なんだ」と、実習をさせてくれました。

そういう中で、私は寿町に住民票を移しドヤで住むようになりました。それがどんどんエスカレートして、年間を通じて地域のことを知らなければいけないとこだわり、4年で卒業できたのですが、結局5年間いました。

そんなところを認めてくれたのが阿部先生で、今も時々「あ、寿の渡邊くんね」と言われたりします。

思い込んだら、それをどんどん突き進んで行っていました。それを受け止めてくれる同級生や先輩がいたり、遠くできちんと見てくれている先生がいました。新潟から全然知らない東京に来て、しかも寿町のような所は新潟にはありませんでし

たから、すごく刺激的ではありますが、そういう所に住民票を置いて生活するという冒険に対して、「いいんだよ」と後押しをしてくれる安心感がとてもありました。

私は、いずれ新潟に戻るつもりでした。新潟という所を見たときに、何をテーマにしていくかで、結局、地域福祉に行き着きました。新潟の地域を考えると、過疎の問題に直面しました。

大橋（謙策）学長の研究室を訪ね、過疎地に興味があると先生に相談したら、多分その場で紹介状を書いてもらったと思います。書いた先が、島根県瑞穂町（現在の邑南町）の社会福祉協議会でした。

私は関東エリアとか新潟、東北、北陸をイメージしていたのですが、「そこに日高（政恵）さんという、福祉活動専門員の方がいるから、そこを訪ねていきなさい。そこへ行くんだったら、知夫里島（隠岐諸島）の公民館の職員で、社会教育に一生懸命な方がいるから、そこも訪ねなさい」と、大橋先生に言われました。全然土地勘がなかったのですが、「わかりました」と行くことになりました。

貧乏な学生でしたから、ずっと各駅停車で訪ねていきました。瑞穂町の社会福祉協議会は、最寄りの駅から歩いて半日です。私がとにかく歩いていったら、一遍車で通った人がまた戻ってきて、車に乗せてくれました。

半ズボンに大きなリュックサックをしょって行くものですから、結局、日高さんの家に数泊お世話になりながら、専門員の私生活も含めて、社協の活動を勉強させてもらいました。そのあと、知夫里島を訪ねましたが、当然そこでも数泊ホームステイしました。

その中で、丸ごと地域に根差して業務を展開しているソーシャルワーカーの熱意に触れ、本当に自分自身がそういうことを志していきたいと考えました。

学部時代に文献研究を十分にしなかった反省点がありますが、全然予想もしない地域に行き学べたことがきっかけになって、自分として本当に心

の底から地域福祉の方向に進んでいきたいという道が見えてきたような気がします。

また、当時は、他大学から非常勤講師として多くの先生方が来ていました。その先生方がそれぞれの大学で持っているゼミの合宿に入れてもらい、早稲田大学の横山（宏）先生からは新潟県十日町市の公民館活動や、明治学院大学の河合（克義）先生からは岩手県沢内村（現在の西和賀町）の医療福祉活動を知る機会に恵まれました。本当に多様な現場で学んだことが、今も学び続けられるというか、自分自身そういったものを思い起こしながら掘り下げていける、いい学びの場になりました。

学部の先輩で、国の生活保護のあり方を検討する会の委員になっていた横浜市のケースワーカー大川（昭博）さんとも、授業で夕張炭鉱の話題が出て、「じゃ、一緒に行こう」ということになりました。

冬になると学割と冬季割引が利いたので、20日間ぐらい、夕張や礼文島に行きました。礼文島では、漁師の家にホームステイし、漁の手伝いもしながらいろいろ学んできました。とにかく、いろいろなフィールドワーク活動をやることができたのが、本当に自分にとって財産になっています。

そういう面では、今の学部生は、「窮屈だ」という言い方をすると失礼かもしれませんが、かなりカリキュラムに縛られているところがあるのではないのでしょうか。人材を育成していくという視点で、今後はこの部分で幅が出てくるといいのではないかと思います。

新潟県社会福祉協議会に、新潟の福祉系大学を出て数年という職員がいます。彼が私の発表レジュメを事前に見てアンダーラインを引いたのが、「予備校化？」と、「少人数制を生かした一貫性のある教育の追及」です。どうしてアンダーラインを引いたのか、昨日聞いてみました。

「新潟に福祉系の大学が複数あるけれども、その大学がまとまって新潟の福祉を高めていこうということよりも、それぞれが社会福祉士試験の合格率がどのくらいかというところで競い合っているように感じる。

そればかりに先生たちが神経質になっているようで、学部生とすれば、もっと先生が研究していることをいろいろ聞きたいし、また教えてもらいたいところがある。ほかの福祉系の大学ともいろいろ交流したい。そういう面が心残りです。終わった4年間だった」と言っていました。

「少人数制を生かした一貫性のある教育の追及」では、25年前にお世話になった大橋先生や阿部先生が現在も社大で教鞭を執っていることは、卒業生にとってみると、本当に心強いです。新潟の大学では割と先生の異動があり、どの先生をよりどころにしているのかつかみきれないまま卒業してしまっただけのことです。

「渡邊さんは、卒業して何十年もたつのに、恩師と呼べる先生がいて、いいですよ」と、20歳も年が違う職員から言われました。こういう面が、社大が今まで大事にしてきたところであり、これからも大事にしていってほしいところでもあります。

社大は清瀬にあります。日本全国の福祉系の大学、例えば新潟にある複数の福祉系の大学を束ねる役割というか、そういう部分もこれから力を入れてもらえると、卒業してそれぞれ地方で頑張っている我々も、何か関わりができます。

期間限定でもいいので、社大主催で地方で、「夏季セミナー」とか、「日本社会事業大学林間学校」などがあるといいんですが・・・。

私の場合は、去年1年間休職して社大に来ましたが、来たくてもなかなか踏み出せない人もいます。地方の大学と社大がうまく連携しながら、地方の人材のスキルアップを図る役割を果たしてもらえると、現場にいる者にとっては、とてもありがたいと思います。

阿部 長谷川さん、よろしくお願ひします。

長谷川 田園調布学園大学の長谷川洋昭です。よろしくお願ひします。佐藤さん、渡邊さんと共通したところが多く、みんな勉強熱心、かつ愛校心旺盛です。その結果、5年で卒業している、「一留」の人です。

私も受験番号はよく覚えていて、4426番で

す。その番号を見つけたときの喜びは、今もしっかりと覚えています。

なぜ私が、そもそも福祉を目指し始めたかです。初めは、福祉は「ボランティア」とか、「優しい人が施しをする」というイメージしか持っていませんでした。高校生のときに何か職業を選ばなければいけないといろいろと考えている中で、非行少年やヤンキーと言われている人たちが、当時は腹立たしい存在として浮かんできました。

どうして非行少年と言われる人は、弱い者いじめをするのか。自分勝手な振る舞いをするのか。「よし、なら俺が警察官になって、彼らを取り締まってやるぞ」、「法学部に入って、自分は警察官になるぞ。そして非行少年と言われている子たちをとっつかまえてやる」という思いで、初めは警察官を志望しました。

しかし、受験に失敗しいろいろと本を読んでいるときに、ある本に出会いました。それが「司法福祉論」です。この「司法福祉」という分野があることを、浪人のときに初めて知りました。いろいろと考えていくうちに、彼らにも、もしかしたらいろいろな事情があるのではないかと。今、彼らの目の前の言動で判断しているけれども、もしかしたら彼らだけの責任ではないかもしれない。仮に自分が警察官となって、「とっつかまえた」彼らが裁判を受け、少年院なり刑務所に入ったとしても、数年たったら私たちの隣の部屋に住む。私たちが住んでいる地域に戻ってくる。

そのことに気付いたときに、私が今まで彼らを見ていた憎しみや批判的な部分から、必要なものが見えてきました。それが教育であり、さまざまなかたちでの福祉的な支援です。

そして浪人をして大学を選ぶときに、法学部はすっぱり私の頭の中ではなく、これは社会福祉学部一本で行こうと、いろいろ調べました。やはり費用面で初めは引かれて本学を選びました。

初め「社会事業」とは、聞いたことがない言葉だったので、これは土木事業でもするのかと躊躇しました。親からも、「おまえ、ちょっと変な大学に行くんじゃないか」という心配もされました。

しかし、東京で学べることも非常に大きく、東京に出るといろいろな生の情報がリアルタイムで来るのではないかと。そういう魅力もあり、社会事業大学を選びました。

松窓寮に入ることになりましたが、初めは非常に不安でした。もしかしたら、「おい、長谷川！コーラでも買ってこい！」など、何か使い走りをさせられるとか、先輩からいろいろと言われるのではないかと、びくびく上京しました。

そのびくびくは、初めは中しました。入寮コンパで目の前に置かれたものは1人1本の一升瓶で、私の場合には、「兵庫県出身 長谷川洋昭さん」と、黒々と筆文字で書いてありました。「これはえらいところに来たな」と思いつつも、先輩たちが受け入れてくれる、歓迎してくれる気持ちが伝わって、これはやっていけそうだなと安心しました。

寮では、週に1回掃除の時間があります。掃除の時間が始まると、上級生が率先してほうきを持ち、雑巾を持ち、バケツに水を入れて動き出します。4年生の先輩が、便所の床にひざを突いて雑巾掛けをしていました。そういう姿を見たときに、「あ、これは先輩にやらせちゃいかん。俺たちも頑張らんといかん」と、1年生同士で話をしました。先輩たちより先に、先輩たち以上に動こう。そういうところで、先輩たちの背中から「率先垂範」ということを学びました。

寮生活はとても楽しく、その中でいろいろな出会いがありました。昔卒業した顔も見ることがない先輩が、両手いっぱいのお酒を持って寮を訪ねてきます。災害用ハンドスピーカーを持って、「おい、これから酒を飲むから、全員集合！」と言うのです。時には夜12時を過ぎるときもありました。はた迷惑なのですが、ただでお酒が飲めるという下心もあって、先輩が待つ部屋に行きました。すると先輩が、「福祉とはなあ」と、いろいろな理想、現実、葛藤を私たちに話してくれます。それを聞けるのが非常にうれしい。「ああ、寮に来てよかったな、社大でよかったな」という思いがいろいろありました。

寮は、分野は違えども同じ志を持った人たちが、それぞれのフィールドからいろいろなものを持ち寄って角逐し合う、すばらしい学びの場、出会いの場でした。

今、寮でのいろいろな語らいを思い出す中で一つよく覚えているのが、本学の50周年記念式典です。天皇・皇后両陛下もいらっしゃって、大変大きなイベントでした。この日の夜、同期、先輩、後輩、仲のいい者が十数名部屋に集まり、「この大学の100周年のときには、俺たちがそれぞれの分野で、『この人あり』と言われるような存在になれるように、今から頑張ろう。100周年は、俺たちが主役になれるように頑張ろう」と、静かに杯を傾けた思い出が残っています。

職業を選択するときに、入学してから考えたのは少年院の先生、法務教官です。彼らに対しての矯正教育、更生保護を考えていこうと、東京家庭裁判所の「東京少年友の会」に学生会員として入りました。

試験観察の少年たちと合宿やレクリエーションをやったり、子どもたちとかかわって、この子どもたちから冷たい仕打ちも受けながらも、実際の学びをやっていきました。

その他BBS会に入り、少年院のレクリエーション活動をやりながら、大学で学んだことは当然ありますが、現場に出て、フィールドから学ぶところも非常に多かったと思います。

「現場が大事だ。フィールドから学んでいかないと、福祉というのは本当にわからない」ということを教えてくれたのは、寮の先輩です。私たちが、「大学に入って、これからどういうふうに勉強していこうか」といろいろと模索しているときに、ある先輩が「おまえら、福祉の勉強したいんだろ。福祉を勉強するんだったら、どんな分野でもまず貧困の現実っていうものを肌で知っとかないだめだ。よし！今からサンヤに行くぞ。」と言いました。サンヤと聞いても、どういう字を書くのかも判らない、そういうレベルでした。台東区日本堤にある日本最大のドヤ街の山谷地区です。先輩にそこに連れていかれました。すると私の目に飛び

込んできたのは、血反吐を吐きボロ雑巾のように道に横たわる人でした。これはショックでした。「この人たちと色々話がしたい。」と、一ヶ月に何度かは土木作業員の格好をして通うようになりました。そして、山谷の玉姫公園で一緒にたき火を囲み、おっちゃんたちがどこからか集めてきたビール、ウイスキー、焼酎などをごちゃ混ぜにしたわけのわからない液体を一緒に飲みながら、私自身は吸わないたばこも一緒に口だけでふかしながら、おっちゃんたちとのかかわりを大切にしてきました。そういうところで現場から学ぶことの大切さを実感し、今は大学でこの様なことも学生たちに伝えようとしています。

結局就職したのは、新宿の青少年福祉センターです。ここは児童養護施設、児童自立支援施設、少年院を出た子ども、家庭裁判所などから試験観察に来た子どもたちが、働くことを通して自立を目指す施設ですが、そこに大学5年生のときに住み込み就職というかたちで入職しました。卒業論文は、そこでの実践、彼らとのかかわりを基に、拙いですが自分なりに書けたと思います。

働いているときは、私自身が若かったこともあり、日に日にころころ変わる子どもたちの喜怒哀楽の感情と付き合っていく、かかわっていく日々は毎日が大変でしたが、非常に楽しかったです。

私がそういう楽しい職場を離れ、なぜ大学に来たかという、春日部のある暴走族の子が入ってきたときに、「長谷川さん。俺の話が一番聞いてくれた大人は、俺のことをブン投げた埼玉県警のお巡りだった。」と言いました。そのことを聞いて、私はふと昔のことから今までを振り返りました。

私が今仕事でかかわっている子どもたちは、警察、裁判所、少年院、児童養護施設など、いろいろな施設、機関を経てきた子たちです。でも本当に葛藤して、悩んで、彼らが魂のこもった言葉をかけてほしいタイミングは、司法的な流れで言うと、一番最初の警察官ではないかと思います。これまでは少年院から出てきた子ばかりを相手にしていたので、子どもが迷っている「そのとき」に

言葉をかけられる立場に就きたいと思い、29歳のときに思い切って退職し、警察官を志望しました。

高校生の時の私は憎しみを持って非行少年を見ていましたが、これからは今までの経験と技術をもって、彼らの気持ちがわかる少年警察官になろうと決意しました。そして、トラックの運転手や土木作業員、日雇い労働などをやりながら、頑張って公務員試験に見事合格！どこの県警とは言えませんが、五つ、六つ受かりました。

警察官の制服に袖を通すこともできましたが、しかし最終的には不採用となってしまいました。それは、私自身が高校生のときに司法的な段階を経験してきた経歴があること、その他もろもろあり、残念ながら夢がかなうことはありませんでした。

大学を出たての人よりも、よほどあの子たちの気持ちがわかるだろうという自負もありました。せっかく合格したのにと、しばらくは失意の底で、これから社会に対してどう貢献していけばいいのかと考えているときに、私の家内から、同じ「社大生」で松窓寮女子部の出身ですが、「どうせここまで勉強したのだから、大学院でもう一度勉強してみたらどうですか。」というアドバイスもあり、本学の博士前期課程に入学しました。

こちらで指導して下さったのが、阿部（實）先生でした。阿部先生は、私が学部1年生のときの基礎ゼミの先生です。私は、先生は第一希望ではなく第三希望でしたが、なぜか阿部先生になってしまいました。そしてマスターでも指導を受けました。

大学院に入って、初めてこの大学の先生方のごさを遅まきながら知ることになりました。学部ときはどうしても受け身で、こちらの階段教室等でも、見られていないと思いついて本を読んだり、何かいろいろとそこそそしていましたが、大学院は受け身ではありません。自分から学ぼうとして目的を絞ってきますから、本当に必死になって学んでいくときに、改めて社大の持っている包容力とか力強さを実感しました。

阿部先生の厳しい、しかし、愛情あふれる指導

のもと、2年間で修士を終え、期せずとも教職の道に行くことになりました。今は、社会福祉士養成にかかわっています。自分としては、学生るときは実習生、働いているときはそういう実習生たちを受け入れる実習指導者、今は大学教員として学生たちを送り出すという三つの立場を経験しているので、それぞれの気持ちを受け止めながら、これから未来ある学生を立派なソーシャルワーカーとして育てていきたいと思います。以上が、私の個人的な社大のエピソードです。

阿部 「これが社大の教育の成果だ」という、熱き思いはよくわかりましたが、質問を受ける前に、一言ずつお答えをお願いしたいものがあります。うちの大学は、対外的にも学内的にも、厚生労働省から委託を受けている状況の中で、常に先導的、開拓的教育モデルを目指すカリキュラムの改革をやって、学生をうまく育て上げることに努力しています。

シンポジストの3人にとって、皆さんが受けてきた教育の中で、それぞれ40年前、30年前、20年前を考えたときに、今から振り返ると、社大の学部の教育は、こういう面でその時代を考えると先進的なことをやっていたということを挙げてもらえれば、存じます。

佐藤 40年ほど前のことなので、もう忘れていますが、社大の中で、私自身が一番得たことは、すばらしいスタッフがいたことです。先ほど、学生時代のことはよく話しましたが、図書館の職員になってから大学の先生ともお付き合いをし、大学教師と職員という立場の経験をしています。

その中でいろいろ学んだことは、「熱い思い」がすごくありました。社大の先生は特にそうですが、授業の時間だけではなく時間に対しての思い入れのほうが、むしろ非常に多くあったのではないかと思います。社大の給料はそんなよくありませんでしたが、よくあれだけ飲めたというぐらい飲んでいました。今はもっとお金があるはずですが、そういうことができないのは、どこが違うのかと思います。

皆さんは現場に出ています、「私にとっても『社会調査実習』というフィールドワークが、非常に大きな財産で、それが原点だ」というお話をしました。渡邊さんも長谷川さんも、フィールドワークのかたちは違いながらも、いろいろなところで体験しています。お二人は寿町とか山谷での体験でしたが、原点があって、それぞれ社大生は、どこに原点があるかと、「思い」が一つにつながるところが、線としてあるのかと思います。そういうことが、これからの社大にとっては大事なことです。

福祉に携わる者の根本的なマインドがあり、その中で、ものすごく包容力があって、それぞれの学生の主体性を活かして、いろいろな動きの中から指導、助言をしてくれる先生が周りにいました。そして、「遠くから見つめて、決して見捨てない包容力があった」という言葉に、なるほどと思いました。渡邊さんの言葉、長谷川さんの言葉、時代が違うにしても、それが社大の線として残っているのではないかと思います。

われわれは、常に人を相手にする仕事に行き着き、その中で何が大切かを、社大のバックボーンとしてきっちり残していけるかということです。ただ、時代に合った、要請に合ったいろいろな教科とか問題はあっても、そこだけはしっかりとバックボーンとして持って、これからも進んでもらえればありがたいと思います。

われわれ社大を卒業した者としては、決してマイナスということは考えていません。できたら、われわれみたいな人間を、もう少しうまく重宝に活用するネットワークのシステム作りを、これからしていくことも大事なことでないかと思っています。

いろいろな意味で卒業生がいっぱいて、いろいろな福祉の実践現場で頑張っているのも、そういう人たちをうまく活用して、そういうものを伝えていくことが、これからの学生を育てていく上にとって、大事なことかと思っています。

先ほどから松窓寮の話が出ていて、社大の歴史は残っている、われわれがいたときのものが、今

の世代までまだ続いている感じを受けますが、今は果たしてどうなのかわかりません。ただ、このお二人にとっては、社大の松寮寮の精神が残っている感じを受けました。そういう守るべきことは、守るようなことを、これからも継続してもらえればありがたいと思います。

阿部 それでは、渡邊さん。

渡邊 社大が原宿から清瀬に移っても、社大としての学生と教員とのコミュニティーのよさは、引き継がれていると思います。また、いろいろな実践現場を紹介してもらいましたが、みな優れた実践現場であり、そこにいる優れた指導者を、先生方がうまく紹介し導いてくれたところがあります。

一方で、私自身の反省点としては、いろいろなフィールドワークが地方だったので、授業に出ないことが多くて、非常に素晴らしい研究・実践をした先生がたくさんいたのに、学部時代にはなかなか学びきれなくて、大変もったいなかったという後悔があります。それについては、去年1年間、専門職大学院で学んだことを契機に、現場に戻り埋れてしまうのではなく、理論面も引き続き学びながら実践していきたいと思います。社大には本当に優れた先生方がいて、自分にとっては学びきれなかったことが、学部時代を振り返ると反省点としてあります。

長谷川 卒業してから、社大の先生、社大の教育の良さを知って、もったいなかった、もっと勉強すればよかったと思っている人はいっぱいいると思います。今後は、専門職大学院という素晴らしい組織もありますので、どんどん卒業生が戻ってきて、さらにパワーアップして、それぞれのフィールドに帰ってもらえればと思います。

私は、この大学には学生に受け継がれている文化が色濃く残っているといつも思います。それは生活の場面であり、人間関係、学びの場でもあると思いますが、そのような文化を学生に意識してもらい、守るべきもの、受け継いでいくものは何か、そしてそこに乗せていくものは何かというものを、ぜひとも新しい今の学部の人にも考えてもらいながら続けていってほしいと思います。

これは、私も外に出てから社大には色濃い文化があったことを、今まで行ったいくつかの学校との比較で感じました。

例えば、フィールドワーク実践の一つであるボランティアでも、学生たちは探し方がわからないのです。提供された資料を見て、その提供された情報を選択していく学生が非常に多く、自分から探していくとか、ボランティアを募集していても、「ちょっとやらせてください」と、自分から相手をお願いしてということが、非常に欠けていると感じました。

先ほど私は山谷の話をしました、いくつかの学校の学生を実際に山谷に連れていきました。5、6人の学生ですが、一緒に行ったらタバコを吸って、すばらしいおっちゃんたちの香りを嗅ぎながら交わり、語り合うことを実施しました。「今までは、長谷川と一緒に来ていましたが、これからは皆さんが新しい人のつながりを使って、今度は後輩にバトンタッチをしてください。そしてこの学校で、また皆さんが新しいフィールドを作る文化を皆さんが作ってってください。」と、学生には言いました。

夏にはすばらしい香りを発しているおっちゃんたちですが、冬になると、みぞれが降る中、毛布もかぶらずひっくり返っているおっちゃんがいま。そういうところに学生が行ったことがあると、今後冬に雪が降っていても、「ホワイトクリスマス！」とか「まあ、ロマンチックな日ね！」と、単純に浮かれられなくなります。雪が降っている外を見ると、「あっ、今日はおっちゃんたち凍えているだろうな」と、想像力がついていきます。願わくばそれを同じ世代である学生が、そのような文化を継承してほしいと思います。そういうことを社大で学んだので、今度はそれを私自身が別のところで種をまくように意識して学生とかかわっています。

阿部 ありがとうございます。まとめて、ご意見なり、ご質問なりを受けます。何かありましたら、手を挙げてください。

市川 私は、本年度初めて、通信教育科で社会教

育主事を学んでいる市川です。今日は、皆様方の本当にすばらしいお話を聞いて感謝しています。一つだけ、女性の声の一つも聞けなかったことがとても残念でした。皆さんは本当にすばらしいですが、女子学生の多い社大ですから、やはり女性の声をどうしても聞きたいと思います。20分ずつ3人ならば、15分ずつ4人でもいいので、ぜひ今後は、女性を1人でもいいので、そちらに立たせていただければと思いますのでよろしく申し上げます。

阿部 そのほかに何かありますか。

小林 今年から編入生で入ってきた、3年の小林です。今、お話を聞いていて、大変充実した内容の話ではありましたが、最後に阿部先生から質問のあった、厚生労働省から委託を受け、努力をしている大学として、3人の方々が受けられた授業と今の社事大の授業は、だいぶ違っているのではないかと思います。

出席の取り方にしても、自由から規制に向かっていきます。チェックやカードリーダー、リアクションペーパーなどでの出席のチェックも厳しくなっていますし、先生方自身からも、「ちょっと忙しくて大変だ」という声が聞かれる現状です。その中で、社事大の持ってきた文化のよさとかそういうものも、私自身はとてもよく感じられますが、施設長の佐藤さんからのお話で、やりきれない閉塞感とか、現代の世の中で、最後の長谷川さんの中に、「社会福祉教育のモデルとしての存在感を發揮できるかは、今、ここからの努力が必要」と書かれています。

私も、社事大に期待を持って入ってきた者として、その辺のところを皆さんからお聞きしたいと思います。

佐藤 私は、今、特別養護老人ホームで働いていますが、現場の実態を含めてお話しします。

私のところは、「老人福祉法」と「介護保険法」の二つの法律のもとにあります。介護保険は事業ということで、今までの私どもには、非常になじみの薄い「契約」という概念でいろいろな人々と接しています。その契約の中で、当然やらなく

てはいけないものが、あまりにもあります。いろいろな面で、説明責任は当然あります。納得して、署名・捺印をしてもらいます。契約書を交わし、重要事項の説明書も交わします。

例えば身体拘束の場合は、なぜやらなければいけないかということもすべて書いてあるし、やるとすれば、当然、利用者にも説明して納得してもらいます。たとえそれが、家族から頼まれたことであっても、所定のルートでやらなければいけないし、その廃止に向けての努力がいかにかされているのかも記録に残していかなければいけません。

いろいろな面で、今、介護現場に入ってきた人たちは、本当にやりがいを持って、生身の人間としてお年寄りの世話をする中で、いろいろなものを学び取ったり、人生の先達から学び取るとか、要するに、介護という仕事にやりがいを持っていること以上に、記録とかいろいろなことに押されてしまって、その中でやりがいがだんだんうせてしまって、現場からいなくなってしまいます。つまり志と意欲を持っているのに、手応えを感じる前にやめてしまうというのが現状です。われわれは、1人の人間を一人前に育てるために、1年近くかけて、マン・ツー・マン体制で、社会福祉士、介護福祉士を指導しています。現実はそのような努力をしてマンパワーを養成しています。

今まで、「規制緩和」とか「適正化」という言葉で表わされる中で、いろいろなことが成されてきましたが、それが今、また見直されて、その動きの中で振り回されています。われわれの現場でも、例えば、重度加算、栄養ケアマネジメント、身体拘束の問題、ケアプランの問題、いろいろな場面においてデスクワーク的なものが非常に多くなっているのが現状です。

契約ということで、お互いが納得のうえでやっているのも、こちらがサービスの中でうたっていることは、当然やらなければいけません。また、やっているというだけではなく、記録に残してきちんと証明されなければいけません。多分、これからの介護福祉士とか社会福祉士の教育の中では、「記録」という問題が、非常にクローズアップされ

てくると思います。そこが、今、われわれが非常に悩んでいるところです。夢を多く語れなくなっている現場があります。

そここのところを何とか変えていくような方策を、例えば施設長という経営、運営の立場にある者が、これから考えていく、むしろ、もっと早く考えていかなければいけないことだったかもしれません。本当に今、福祉界の緊急の課題として考えていくべき時期に来ていると思います。熱き思い、やりがいのある仕事の場であるという中にとどまってほしいという思いが、非常に強くあります。そのための具体的なものは何かということ、早急に作り出さなければいけないと感じています。

阿部 3人のシンポジストの方の話を聞いていると、福祉の仕事をしていくうえで、最も基本となる社会福祉（ソーシャルワーク）の価値、福祉マインドで必要とされるものは、社大の教育を考えたときに、正規のカリキュラムの中で形成されたかということ、きっかけになるものはあったかもしれませんが、ある意味で文字化されない部分なので、いろいろ調査実習を通じたり、あるいは、現在で言うと、渡邊さんがいろいろなところの体験学習をしているということですが、例えば、インターンシップに基づくカリキュラムであるとか、厚生労働省、あるいは埼玉県等に学生が行っています。

渡邊さんの時代だと、自主的にやらなければならなかったことを、システム的に教育の中に取り込む試みはしています。また、佐藤さんから、「今、自分がやっている仕事を好きになれ」というお話がありましたが、そういう問題に関しても、福祉の仕事をして人生の目的の一つに掲げて生きていくことを考えたときに、入学した段階から卒業するまで、きちんと自分自身で主体的に達成目標を掲げて、4年間、充実した学生生活と教育を受ける者を、側面的に援助するかたちで、ポートフォリオに基づく教育をはじめとして、教員1人が、1学年7人から8人ぐらいの学生を担当して、そういうことに関する相談に乗る教育システムを導入しています。

佐藤さんとか渡邊さんから見たときに、そういう正規のカリキュラムの中で教育できるものと、学生の主体的な活動を考えたときに、教員のアフターファイブのボランティア活動も必要です。また、学生同士の教育意欲を総合的に考えないと、ソーシャルワーカーの教育はうまくできません。

うちの大学の大きな悩みは、総合大学というかたちで、大学院が二つと通信課程ができて、全体的な動きはうまくいっていると思います。しかしながら、例えば教育スタッフが増えたかということ、必ずしも事業規模に見合う教育スタッフが確保できていない状況もあります。

わかりやすく言うと、原宿時代の教員の負担と、清瀬に移って、両大学院ができて、通信課程ができたことを考えると、アフターファイブ前の昼間の負担が、講義だけでも、少なくとも2倍になっていると思います。

その中で、「出欠を厳しく取れ」とか、「授業評価とリアクションペーパーを取って、学生の意見を踏まえて、次の講義をしなさい」ということでもありますので、カリキュラムは原宿時代と比べて相当充実しましたが、学生が自主的に育っていくことを考えたときに、仮に学生同士の教育力とか、アフターファイブの教員との関係を考えると、頑張ろうとは思いますが、相当難しい状況に来ています。

今日、話したような仕組みとか、教員に「アフターファイブで学生と3時間ほど付き合ってください」とか、「授業が5時50分で終わるとは考えるな」ということは、要するに、9時まで、清瀬のキャンパスで自主的な授業をやると考えるのは、学生は無理なので、大変なことだと思います。

3名のシンポジストの方たちに、今日、お話しいただいた、福祉マインドとかソーシャルワークの価値は、理論的にも実践的にも、基本です。そこからスタートしますので、それを学部での4年間の教育の中で、どうかたちで取り組んでいくかということ、真剣に考えないと、原宿時の優秀な佐藤さんとか、渡邊さんとか、長谷川さんとか、そういう学生が育っていくかどうかは、自然の流れ

に任せていたのでは、なかなか難しいと思います。

今日の話聞いて改めて感じましたが、そういうものは、場合によると、清瀬に移転してきてから、学生の間で希薄化しているかもしれません。むしろ、そういうことを教育するという話になると、学部で行くと、「総合科目」が1年生にあります。これは、市民の公開講座を兼ねたかたちになっています。ここに、今はたった3人ですが、本学の学部の卒業生を呼んで、1年生に話をしてもらう機会を3回だけ持っています。

むしろ、今日の話とかを聞いていると、思い切った話ですが、同窓会等において、こういう話を継続的に、福祉の専門という、うちの教育で知識を身に着けてしまう前に、1年の入学直後とかホットなときに、まとめて土曜日の午後とか1日を使ってお話をしてもらうことも、一つのこれからの社大の教育の課題かなと思います。

こういう教育ができるのは、逆に言うと、それだけの人材を輩出してきた社大でないといけないので、社大の教育の特色を出すことを考えても、そういうことを本格的に考える時代状況なのかと思いました。

A 話をさせてください。

阿部 どうぞ。

A 私は、佐藤さんが生まれた年に社大に入学をした一人です。私の同級生は44人で、食べることが大変重要なことでした。朝はコッペパン、お昼は水団、夕食はトコイモという時代でした。寮も、15畳の部屋で8人が寝起きをしている状況でした。2階が男性で、男女共用の時代でした。先ほど、福祉現場へ行っているとか、寮生活の状況の話がありましたが、それらは、われわれの学生時代のことが、そのまま受け継がれている印象を受けました。

ただ、われわれの学生時代は、学問としての社会福祉はそれほど発展してない時代で、例えばケースワークにしても、仲村先生がアメリカに行く前ですから、いいケースワークというのは、竹内愛二さんの本を読まされた程度の授業でした。

しかし、そのころの社会事業専門学校は、われわれの心を育てた感じがします。今日のようなシ

ンポジウムには、学生が全員出てくるのは当たり前ですが、われわれが学生時代は、先輩が来ると、その先輩をつかまえて、「どんな仕事を、どんなふうにやっているのか」を聞いて、いろいろと自分の学習の参考にしました。

先ほど阿部さんが言ったように、先輩たちを集めて、後輩たちに話を聞かせることは、ぜひ必要だと思います。ここに学生がいるとすれば、大いに仲間に、「こういう際には、出席すべきだ」と宣伝してもらいたいと思います。

阿部 ありがとうございます。それでは、まとめて代えて、お一人3分くらいをお願いします。

佐藤 社大は60余年で、私が社大に入学してから40年ちょっとたちますので、いろいろな実践を積み重ねてきて、それだけの実践内容、バックボーンを持っている先輩諸氏がいっぱいいます。その先輩諸氏の力を利用しない手はないだろうと思います。関東近辺にもたくさんいるので、手弁当で、電車賃だけで来てくれる人もいます。そういう人たちをもっとうまく活用していくべきです。阿部先生の言われるように、心に福祉マインドをきちんと培っていく、続けていくことが、社大の大事なことではないかと思います。

今は、大学そのものの中では、時代に沿ったかたちのカリキュラムが組まれていると思います。それは、専門的なことを研究している先生方にお任せしても、せっかくあるわれわれ卒業生たちの財産を、もう少しうまく使ってもいいのではないかと、つくづく思っています。

うちの利用者の皆さんに、「おめえたちは戦争を知らない。貧乏を知らない。神仏を知らない」という言葉を言われたときに、ものすごいショックというか、「あっ」と思って、考えさせられました。それは、これから老人の年代に入る我々団塊の世代への警告のように聞こえました。それからは、敬老の日には、必ず戦争の話が式辞の中に入れて、お話しさせてもらいます。私が今大事にとりくんでいるのは、私たちの施設を利用している老人の人たちから、自分達の歩んできた人生やその中で培ったこと、伝えたいことを聞かせてもらうこと

です。今のうちに聞かないと、あといなくなってしまう。そういうものを大事にしていきたい、そういうことを面々と伝達していくことが、歴史につながっていくのではないかと思います。そういう意味で、先輩たちの財産を大事に活用していくことも、これから考えてもらえればありがたいと思います。

渡邊 今日、専門職大学院の同期生が何人か来ています。私は職場に入って20年目で、去年1年間休職して学びましたが、自分にとって大変勉強になりました。専門職大学院には、20代から60代までさまざまな地域、さまざまな現場から集まっています。

ただ、残念ながら、1年間学び復職を保障されている人は少なく、多くは職場を辞めているので、卒業して、また新たに自分で職場を探さなければなりません。中には自身で、社会福祉士として開業を目指している人もいます。

専門職大学院が、リカレント教育の場として本来の目的に合ったかたちで、1年間学んで、再び現場に戻って、さらに現場でリーダーとして役割を果たしていく仕組みになれば、なおさらのこと、社大が持つ売り物としての価値が高まると思いますので、そういった現場の職員が不安なく専門職大学院で学ぶことができる仕組み作りを大学からもどんどんアピールしてもらいたいと思います。

長谷川 先ほど、編入3年生の小林さんから、『『存在感』という言葉はどういうことなのか』という意見がありましたが、多分このシンポジスト、司会の阿部先生を含めて、いろいろ発言した中のOBの力の結束が集約されて、この存在感は出てくるのではないかと、私自身、今話をしているうえで感じてきました。

私自身は社会福祉士養成の場にいますが、社大の歌詞の「社会の福祉誰（た）が任ぞ」というフレーズは、私が大学に入って校歌を歌ったときに、ほかにもいい部分はありますが、これは本当に社大生の社会的役割を一言で表している部分ではないかと思いました。

私はレジュメに、「肩ひじを張らない程度の使命

感と責任感、そして矜持」と書きましたが、大風呂敷を広げてしまうと、社会の、国民の負託にこたえる義務がある、とまで私は思っています。それは、社会のために何かを成したい、それは誰が見ていなくても、誰が知らなくても。そういう思いで社大の諸先輩方はやってきたのではないかと思います。

よく今は、「福祉の現場はハードワークだ」とか、「それに見合った賃金が支払われない」といった理由で、学生が福祉学部を志向しない状況になっています。でも、それは昔からそうでした。昔から制度がない中で、そこに支援を求める人がいるから、私たちの諸先輩方は腰をかがめて、手を差し伸べて、そういうことをやってきたと思います。

そこで、現場の職員、教員がどれだけ学生と夢を語れるかということが、これからは非常に大切になってくると思います。ソーシャルワーカー（社会福祉士）の養成教育に関して、確かに私の講義でも出席を取っています。その私も学生時代は当然サボって、いろいろなところで遊んだり、デートをしたりしました。そういうゆとり、ハンドルの遊びの部分から得るものは、非常にたくさんありました。

今はどこの学校も、同じ出版社の「社会福祉士養成テキスト」を使っています。学生のかばんからのぞいている教科書を見ると、みんな同じものを持っています。勤務校と同じ路線に社会福祉士の養成校はいくつかありますが、学校が違って、どこの学校のどの学生も、みんな同じ教科書を使っているのです。そういうことで、多様な価値観を醸成できて、広くて深い視野を持ったソーシャルワーカーを本当に養成できるのでしょうか。少し薄ら寒い、憂鬱な気分になっています。このままでは、金太郎あめのように同じようなソーシャルワーカーが生まれるのではないかと思います。

しかしながら、国家試験に合格しなければいけないジレンマがあることが、社会福祉士養成現場の一つの現状ではないでしょうか。

最後に、私は学生によく「仕事を選ぶということは、生き様を選ぶことだ」と話しています。これから自分のフィールドで、自分の守備範囲はがっちり守って頑張っていきたいと思います。

B 阿部先生、一つだけ質問させてもらえませんか。

阿部 どうぞ。

B 編入3年生のシロトです。先ほどのポートフォリオですが、「1人の先生が、7、8人の学生の面倒を見る」というお話でしたが、私は編入生で、編入生にはポートフォリオがないのではないかと思いますか、ありますか。

阿部 去年から始めて、2年生までしかありません。4年間継続するというので、事実上は、3、4年生は、ゼミの先生がポートフォリオを踏まえて指導をするかたちになっているので、ポートフォリオを持っているのは、現学部で行くと、2年生までです。

B 私もゼミに入っているので、ゼミの先生もいますが、できることなら、編入3年生にもその機会を与えてほしいと思います。なぜかという、私も福祉現場に立ってきて、燃え尽きそうになって、もう1回こうやって勉強をしに来ています。たくさん現場経験を積んでいる先生も多いと思うし、深く研究している先生もいると思うので、いろいろな先生方のお話も聞きたいと思います。ゼミの先生以外にもかかわっていききたいので、今後、検討してほしいと思います。

先生方も大変だと思いますが、よろしくお願ひします。

阿部 学部長としては、弁解しておかなければいけないと思ったのは、渡邊さんのレジュメの2枚目、「社会福祉学部教育への期待」というところで、「社会福祉士資格取得のための予備校化」という指摘もありましたが、日本社会事業大学社会福祉学部に関しては、決してそういうことはありません。

本学の学部のカリキュラムは、あくまでも社会福祉士を全員に取らせることが基本です。プラス、保育士、精神保健福祉士、介護福祉士、高校の福

祉科の教員免許、スクール・ソーシャルワーカー、わかりやすく言うと、127単位が本学の基本的な卒業に必要な最低履修単位です。介護福祉コースだと137単位になりますが、そのうち、社会福祉の受験資格にかかわる科目は、46から48単位です。実際は、社会福祉士プラスアルファで卒業しますので、多くの学部の卒業生は、卒業するまでに150単位前後を取得しています。

受験資格のための科目が、卒業するときに、4年間で取得した単位の3分の1とします。残り3分の2の100単位ぐらいは、基本的には自分で選んだコースとか、資格課程とか、そこの勉強をしているので、ほかの大学に比べると、「予備校化」というのは、「教養教育委員会」というのがあり、ソーシャルワーカーを育てるのに教養教育をしなければならないということも本学の場合はあるので、そこは誤解のないようにお話しさせていただきました。

結果的に、国家試験から行くと、参考までに言うと、今年の直近の社会福祉士の国家試験ですが、ようやく卒業生228人全員が受験しました。全国でもほかにはないと思います。228人全員が受験して、142人が合格したので、合格率が62.3%で、約3分の2の学生が国家資格を取得したうえに、それぞれ保育士であるとか、介護福祉士、精神保健福祉士、教員免許、そういうものを取得して卒業しています。

本学では、少なくとも、「予備校化」という感覚をとらえたら、うちの大学では、先生方から学部長としては縊すかんを食うという、それだけの見識のある学部の先生方がそろっているの、そこは、安心していただければと思います。

なお、参考までに言うと、原宿時代には、社会科の教員免許と養護学校の教員免許があって、清瀬に移転したときに、「社会福祉士だけでいい」ということで、教員免許はやめました。福祉科の教員免許ができたので、それを復活して、来年度からは、特別支援学校（旧養護学校）の教員免許が取得できるようになります。福祉と教育の連携、特に教育のこととなると、福祉のことにかかわり

ますので、いづらか新しい目を出せればということで、単に社会福祉士の受験資格対応というカリキュラム改革ではなくて、学部のカリキュラム改革を検討中です。

そのときに、いろいろと今日、お話を聞いたか

たちで、先輩方が持っている英知を、学部教育に反映できるような仕組みも考えたいと思っていますので、その際には、協力をお願いします。

まとめになったかどうかわかりませんが、本日のシンポジウムは、これで終了します。